モノグラフ・高校生'93

vol.39 「自立」の遅れがちな高校生

静岡大学教授 深谷昌志

目次

自分に自信をもてない……深谷昌志 …… 2

〔調査レポート〕「自立」の遅れがちな高校生 7

本報告書の要約 …… 8

第Ⅰ章 生活習慣の自立 …… 10

1．サンプルの構成 …… 10

2．家の手伝い …… 13

3．自分のことをしているか …… 16

4．1人でしていること …… 18

第Ⅱ章 親との関係 …… 21

1．親とうまくいっているか …… 21

2．両親への気持ち …… 24

3．母性的な気持ち …… 27

第Ⅲ章 おとなになる年齢 …… 29

1．おとなになりたいか …… 29

2．何歳からおとなか …… 33

3．おとなの領域別の年齢 …… 35

4．おとなになるのに必要なこと …… 38

第Ⅳ章 自己評価に関連して …… 40

1．高校生としてのタイプ …… 40

2．将来の生活 …… 44

3．将来できそうなこと …… 47

まとめに代えて …… 50

資料1 調査票見本 …… 51

資料2 基礎集計表 …… 62

＊おことわり 本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

自分に自信をもてない

静岡大学教授
深谷昌志

怒らぬ若者たち

高校生をみていると，なんとなく幼い感じがする。若者らしいたくましさに欠け，一昔前の小学生か中学生をみている印象を受ける。

一昔前まで，若者を語るときは「怒れる」という枕言葉がついていたように思う。しかし，いつの頃からか，「心やさしい」が若者についてまわるようになった。

考えてみると，若者の怒りがみられたのは，安田講堂の封鎖などに象徴される学生運動はなやかなりし頃で，昭和40年代の前半の話になる。韓国などの学生運動の高まりをみていると，怒れる学生の姿が認められる社会があるのに気がつく。しかし少なくとも，日本に限ると，若者たちは怒りをあらわにしなくなり，心やさしい若者が増加している。

善良で聞き分けがよい。そうした若者たちは心の底から怒りの感情を失ってしまったのか，それとも，いきどおりを隠しているのか。彼らの本音をたずねてみたい気持ちがする。

高校生たちに，日本の国についての評価をたずねてみた。図1が示すように，生徒たちは日本を「学歴がものをいい」，「大企業の力が強く」，「一部の人が政治を動かし」，「若者とおとなの考え方の差が大きい」とみなしている。

高校生に限らず，若者は自分のことだけに関心を寄せ，政治や社会の動きに無関心だといわれる。スチューデント・アパシーがそうした指摘の一例だが，少なくとも図1を手がかりとすると，若者たちは政治に無関心なのではなく，日本の現状にかなりの不満感を抱いているのは確かなように思われる。

それでは，高校生はそうした不満をどう解消しようとしているのか。「あなたががんばれば，日本の社会はよくなると思いますか」の問いに，「よくなる」と答えたのは，「とても」の2％に「かなり」の6％，「やや」の11％を含めても19％にすぎない。そして，「ぜんぜんよくならない」の反応は38％と4割に迫った。また，「成人したら，日本の社会をよくするために，なんらかの形で政治的な活動をしたいと思いますか」についても，「するつもり」の者は12％にとどまっている。

したがって，生徒たちは無関心なのでなく，鋭い目で社会を批判している。しかし，そうした批判は批判の域を超えることなく，行動面に結びついていない。

マイホームへのあこがれ

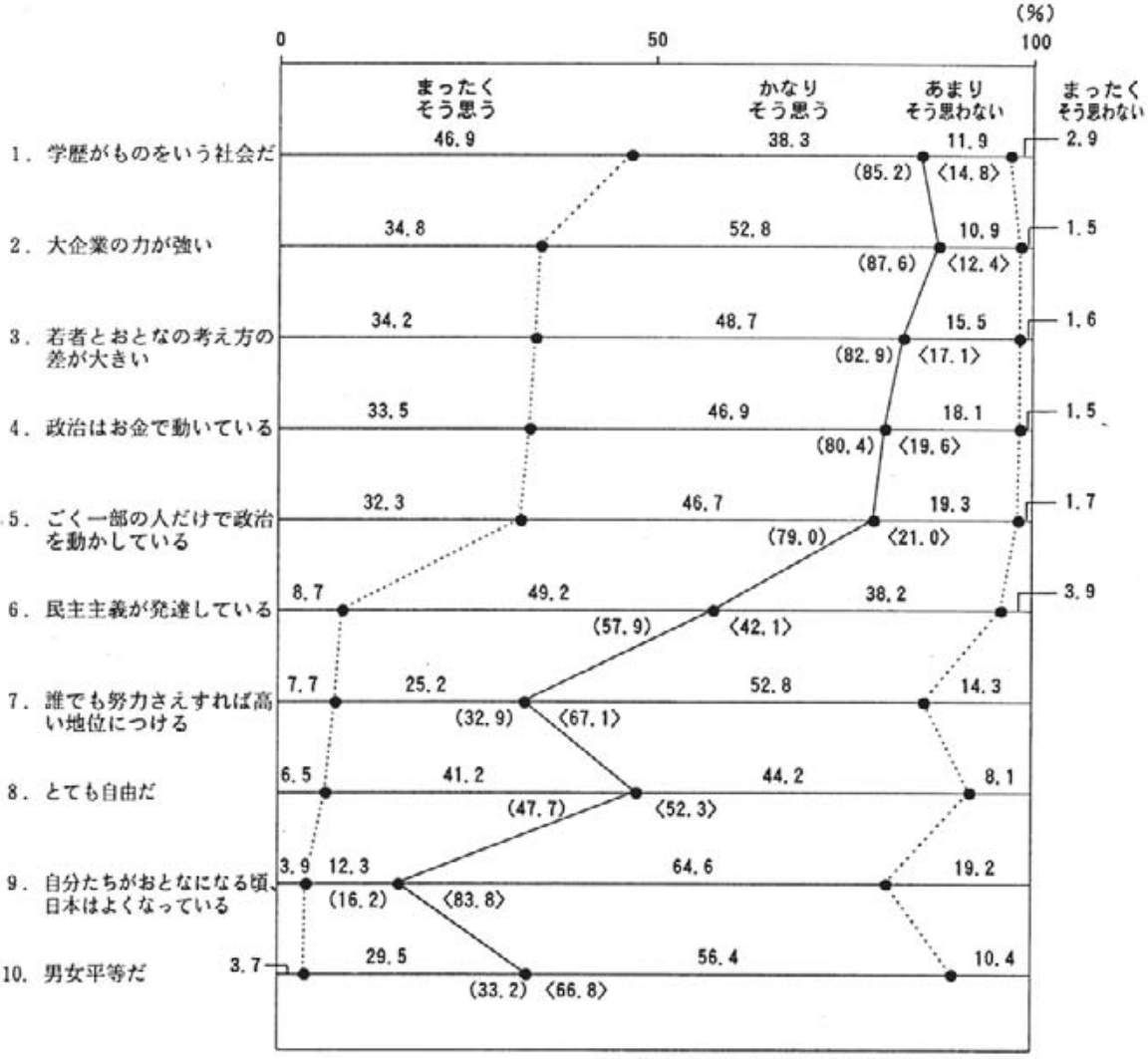
批判するだけで行動をしない生徒たちが心の底から望んでいるのは何なのか。青年なのであるから，夢がまったくないわけではない。しかし，かつての青年と比較すると，目指すものが変わっているので，おとなたちがとまどう。

高校生などにアンケートをとると，彼らが何より強くあこがれるのは，好きな人と出会い，恋愛結婚をして，幸せな家庭を作ることだという回答が得られる。もちろん，かつての青年も恋愛を大事に考えていた。しかし，青年たちがあこがれていたのは恋の過程で，その先まで具体的なイメージを抱いていなかったような気がする。

しかし，本モノグラフのレポートで繰り返

図1　日本はどんな国か（高校生）

——学歴がものをいう社会——



（　）内は「まったく＋かなりそう思う」割合
〈　〉内は「まったく＋あまりそう思わない」割合

し指摘しているように，現在の高校生はマイホームについて，かなり克明な像をもっている。女子高校生たちは，結婚をしたら手作りの弁当を夫に持たせたいといい，男子たちは妻が38度の熱を出したら会社を休んで妻の看護をしたいと考えている。また，結婚してからしばらくは2人だけの生活を送り，その後，子どもをもって，子どもをきちんとしつけ，幸せな家庭を作りたいと考えているのも多くの高校生に認められる傾向である。

そうした高校生の抱く家庭像をもう少し紹介するなら，郊外の一戸建ての家で，専業主婦の母親が2人の子どもをきちんと育てていきたいというのが，高校生のマイホーム像となる。

高校生のうちから社会的な達成に関心を示さず，文字通りにマイホーム（私の家庭）作りを何よりも大事に考える。こうした若者たちをみて，おとなは「ミーイズム」とか「新人類」とか，「指示待ち人間」などと名づけるのであろうが，これまでエコノミックアニマルと批判されるほど，社会生活を優先させてきたおとなたちの生き方に問題が多いことも確かであろう。

仕事といったところで，企業の歯車のように組織に組み込まれるだけだ。生きていくために働かざるを得ないと思うが，その他の時間は，それだけに自分を大事にしたい。そうしたこだわりがマイホーム志向になったと思えば，それなりに若者たちの心も理解できる。

そうはいっても，かつての私的な生活軽視の生き方も問題であろうが，現代の社会的な達成を断念して私生活へ埋没する傾向にも疑問を感じる。私生活を大事にという考え方はよいのだが，どうして社会的な達成に目を向けようとしないのか。

学業成績の及ぼす影

結論から先にいってしまうと，図2のような結果が得られている。これは中学生を対象としたものだが，生徒たちが，「尊敬され権威をもつ人」や「社会に役立つ人」などになれそうもない，しかし，「いい親になる」くらいならなんとかなりそうと思っているのがわかる。高校生だけでなく中学生たちも，社会の中で活躍するのは困難だと，閉ざされた未来を予感している。そうだとしたら，仮に社会に不満を抱いていたとしても，それ以上に，社会に働きかけることはないように思う。そして，その反動として，すでにふれたように，自分のフィーリングを生かして，自分なりの生き方をするマイホーム作りにこだわる行動にでる。

そして，この図2を学業成績の良し悪しに関係させると，以下のような数値となる。

学業成績	上位	中位	下位
①よき夫（母）	72%	51%	46%
②地味な仕事	49%	37%	30%
③親しまれる人	42%	30%	21%
④才能を生かす	28%	19%	12%
⑤社会に役立つ	30%	11%	8%
⑥金持ちの人	17%	10%	7%
⑦権威をもつ人	21%	8%	5%

（「絶対」「たぶん」なれる割合）

学業成績のよい生徒は，「権威をもつ」や「才能を生かす」はむろんのこと，「親しまれる人」や「よき親」などになれると思っている。しかし，学業成績が下位になるにつれて，見通しの暗さが増す。そして大きくなっても，たいしたことはできそうもないと思う割合が増す。

中学生たちに，「（いわゆる）有名高校」や「（いわゆる）一流大学」へ入れそうかをたずねてみると，これも学業成績によって見通しが異なってくる。

	有名高校	一流大学
成績上位層	68%	65%
中位層	22%	14%
下位層	11%	7%

（「がんばったら，入れる」と思う割合）

学業成績のよい生徒は，このままがんばっていけば，有名高校や一流大学へ入れそうだ，そうすれば，よい仕事につけ，そして社会的

な権威になることもできると思っている。しかし学業成績が振るわなくなると，進学の見通しが立たなくなり，そうなると，社会に出てからがんばったところで，たいしたこともできそうもないと，社会に無関心になる。

個性を生かした生き方を

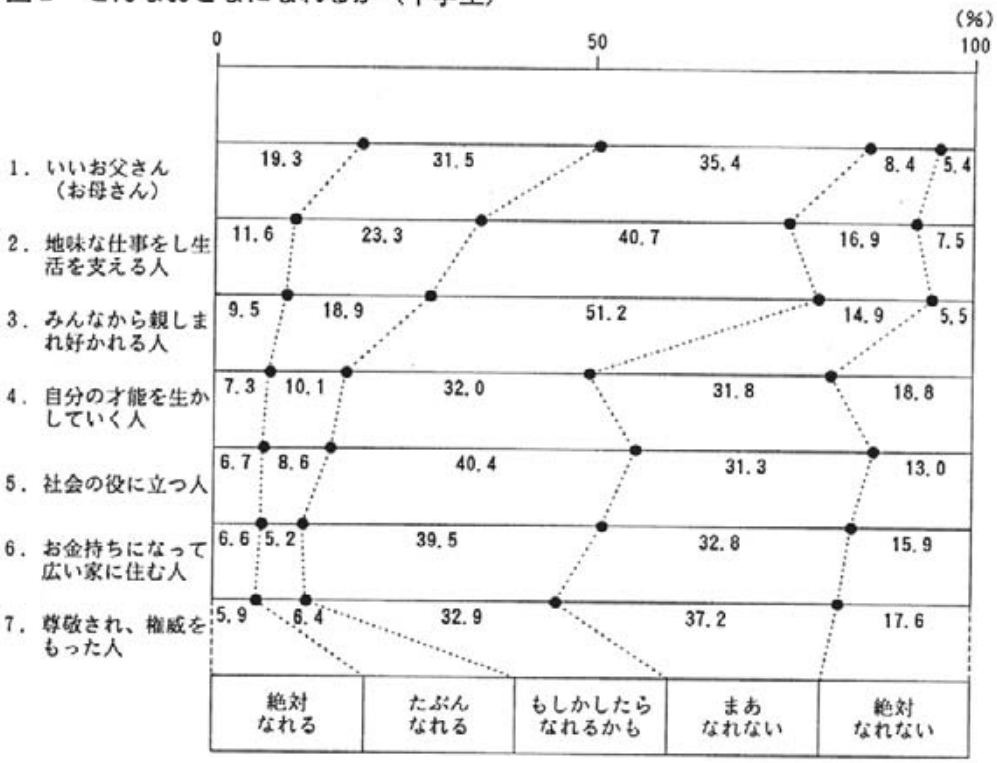
すでにふれた生徒たちのマイホーム志向は，このような学業成績に対する自信のなさがもたらした割合が多い。なにしろ生徒たちは，成績のよさは進学や就職はむろんのこと，市民生活や家庭作りにも影響を及ぼす打ち出の小槌だと信じている。したがって現在でも，成績のよい生徒は社会的な達成に意欲を示しているだけでなく，社会の動きにも関心を寄せている。しかし，成績が中位以下の生徒は，打ち出の小槌を持てない自分に気がついて，せめて自分でももつことの可能な家庭にしがみつこうとする。

それでは，どうして生徒たちは学業成績の良し悪しにそれほどこだわるのか。生徒たちは学業成績は努力に比例すると考えている。したがって勉強の得意な生徒は，自分をまじめながんばり屋，親や友だちから信頼されていると，明るい自己像をもてる。しかし勉強が苦手になると，がんばっても成績のよくならない自分に絶望して，自分を努力のかいがない，怠け型のタイプと思いこんでしまう。そうなると，やる気も失われていく。

このように，自分に自信をもてないのであるから，社会に向かって怒るなどの態度にでることなどは困難で，自分のうちに閉じこもる生活態度が身についてしまう。

こう考えてくると，生徒たちも好んで家庭志向しているのではないのに気づく。生徒たちも，それなりに社会的な動きに関心をもち，自分も社会の担い手になりたいと思っている。

図2　どんなおとなになれるか（中学生）



しかし学業成績が不振だと，社会に役立ちそうもない。だから社会に背を向けるのである。

生涯学習の時代を迎え，いつでも誰でも学べる社会となり，高校時代の学業成績などはそれほど重要でなくなっているのに，生徒たちが過去の世界にとらわれて，成績に過敏になっているのはすでに述べた通りである。

中高校生たちは，学業成績にこだわらずに自分なりの生き方をしたらよいのではないか。そして，学校も親も，生徒たちのそうした生き方を認め，そして育ててほしいと思う。

生徒たちが個性的に生きられるようになれば，生徒たちはもっと積極的に社会に関心を寄せるようになる。生徒たちを家庭志向へ追いやっておいて，社会認識をもてというのはおとなの身勝手であろう。学校や家庭で，子どもの個性を尊重する。そうした生き方が定着すれば，日本の若者たちも，もう少し積極的に社会に関心を寄せ，社会参加するのではないか。しかし，それにしては，高校生が一人の若者としての生活が確立されていないような気がする。親に頼りきった生活をしていたのでは，個性などは育ってこない。そこで，これから改めて，高校生の自立を考えてみることにしよう。

〔調査レポート〕

「自立」の遅れがちな高校生

本報告書の要約

① 家の手伝い

高校生になっても，「食器を並べる」や「食器をしまう」「食器を洗う」などの家事を手伝っている生徒は，多くて4割程度にとどまる。全体として，家事の手伝いをほとんどしていない者が目につく（p.14 図3）。

② 身のまわりのこと

全体として，身のまわりのことを自分でしているようだが（p.16 図5），それは女子で，男子は身のまわりのことも親まかせである（p.17 図6）。

③ 生活習慣の自立

朝1人で起きる生徒は60.4%で，残りの者は親に起こしてもらっている（p.18 図7）。その他の面でも，生活習慣の自立が遅れている。

④ 親との関係

「とても」の23.2%に「かなり」の31.2%で54.4%，それに「やや」の33.8%を含めると88.2%と，9割の生徒が親と仲よく暮らしている（p.22 表6）。しかも，そうした仲のよさは過去もそうだったし，これからもそうだろうという（p.22 図9）。

⑤ 親性に関連して

「赤ちゃんはかわいい」「抱いてみたい」など，親準備性は，女子を中心に高校生の間に定着している（p.28 図15）。

⑥ おとなになりたいか

「なりたい」が54.0%，「なりたくない」が46.0%で，なりたくない生徒が半数に迫っている（p.30 図16）。

⑦　おとなになるのは何歳

20歳から「おとな」と考えている生徒が多いが（p.33 表9），自分がおとなになるのはもう少し遅いとみている（p.34 表10）。

⑧　おとなになる平均年齢

身体的な成熟は18.6歳だが，親からの精神的な独立は19.5歳，仕事の面で一人前になるのは25.4歳だという（p.37 図21）。

⑨　おとなになるのに必要なこと

行動に責任をもち，精神的に自立することが大事だと考えている（p.38 図22）。

⑩　将来の見通し

幸せな家庭は作れそうだが，仕事の面での成功はむずかしそうだ（p.44 図27）。

〔まとめ〕

高校生たちは，おとなになる日が近いことを自覚している。しかし，そうした自覚はみられるものの，日常の生活では親に頼りきりの毎日を送っている。日常生活の自立がおとなへの第一歩だと考えると，高校生の心構えは評価できるものの，自立の遅れが感じられてならない。

〔調査概要〕

時期●1993年2月～3月

方法●学校通しによる質問紙調査

対象●秋田，東京，神奈川，埼玉の公立高校1～2年生

サンプル数

（人）

	高 1	高 2	計
男 子	220	303	523
女 子	219	295	514
計	439	598	1,037

第Ⅰ章 生活習慣の自立

1. サンプルの構成

高校生の自立を問題にする前に，まず，サンプルの概要を紹介しておこう。表1が示すように，サンプルの32.0%は運動部に熱心に参加している。今回は調査時期の関係から，高3のデータを入手できなかったので，全体として，部活動に入っていない者は，「やめた」の17.9%を含めて26.5%にとどまる。

そして将来の進路として，表2のように，半数の生徒が「むずかしい4年制大学」は無理としても「まあまあの4年制大学」へ入りたいと思っている。そうした意味では，サンプルは進学校でなく，ごく標準的な高校生のように思える。

なお，生徒たちの持っている物は，表3にくわしい。豊かな社会を反映して，CDラジカセやロッカー，ヘッドホンステレオなど，高校生は物質的に恵まれた環境の中で毎日の生活を送っているのがわかる。

そして図1によれば，ものを買うとき，自分のこづかいを使っている者が多い。生徒たちは，それほどこづかいをもらっているとは思えないが，それでも，けっこう高校生としての毎日を楽しく暮らしているようにみえる。

表1　部活動

(%)

運動部・熱心に参加	32.0
運動部・熱心でない	16.4
文化部・熱心に参加	13.0
文化部・熱心でない	12.1
以前参加・現在不参加	17.9
参加したことはない	8.6

表2　進路

(%)

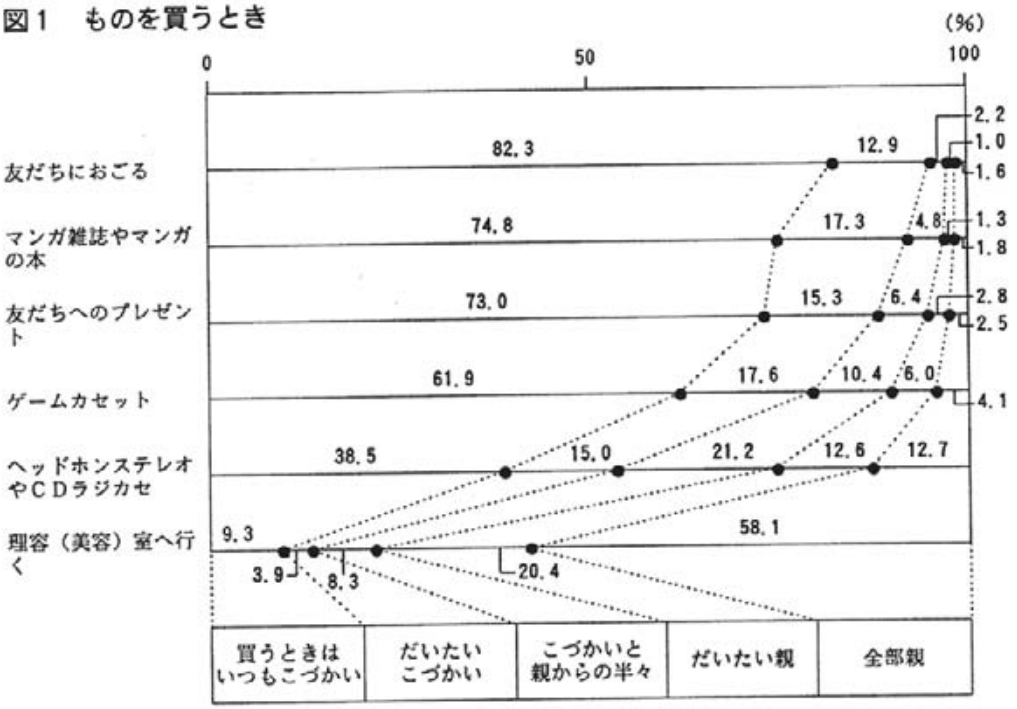
	全体	男子	女子
むずかしい4年制大学	16.7	21.1	12.4
まあまあの4年制大学	50.0	62.7	36.8
短大	15.0	0.2	30.1
専門・専修学校	12.2	10.7	13.7
就職	6.1	5.3	7.0

表3　持っている物

(%)

自分の部屋	85.9
ＣＤラジカセ	82.6
自分専用のロッカー（洋服ダンス）	78.9
マンガの単行本20冊以上	73.2
音楽ＣＤ10枚以上	64.9
ヘッドホンステレオ	54.3
自分専用のドライヤー	47.1
文庫本20冊以上	44.8
自分専用のテレビ	34.8
ギターなどの楽器	34.5
ワープロ	22.8
スキー	20.1

図1　ものを買うとき

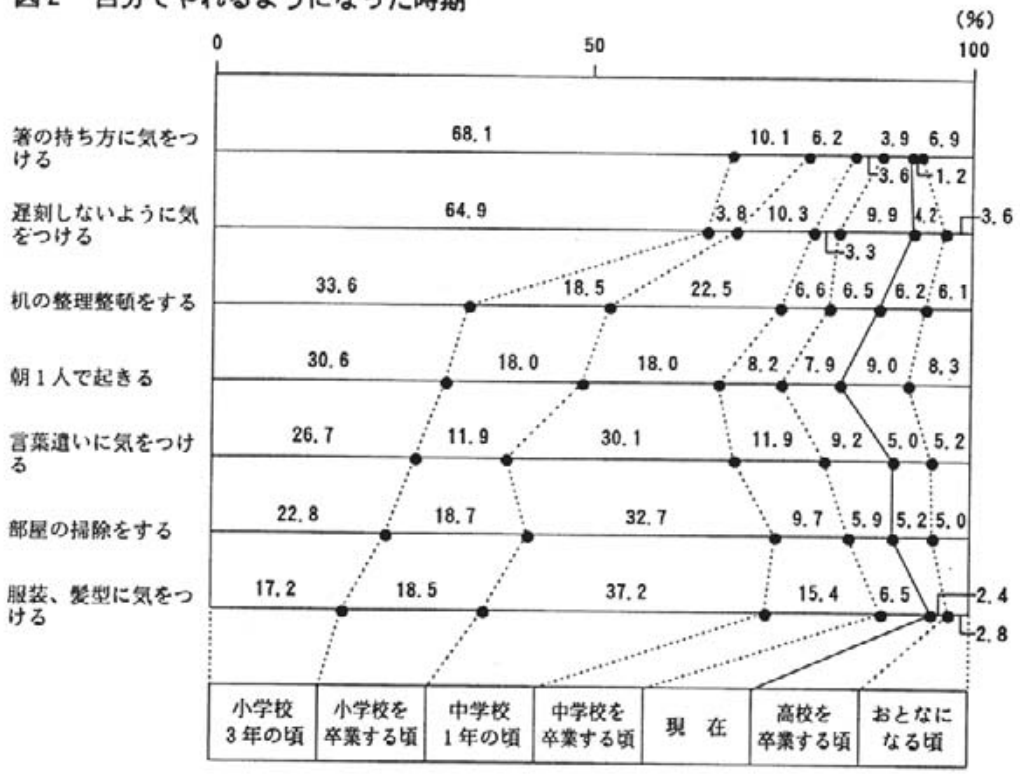


2. 家の手伝い

高校生に限らず，子どもたちの自立が遅れているように思う。もちろん，自立といってもさまざまな側面が考えられるが，とりあえずここでは，生活習慣の自立を問題にしてみよう。

まず，生活習慣については図２のように，

図２　自分でやれるようになった時期

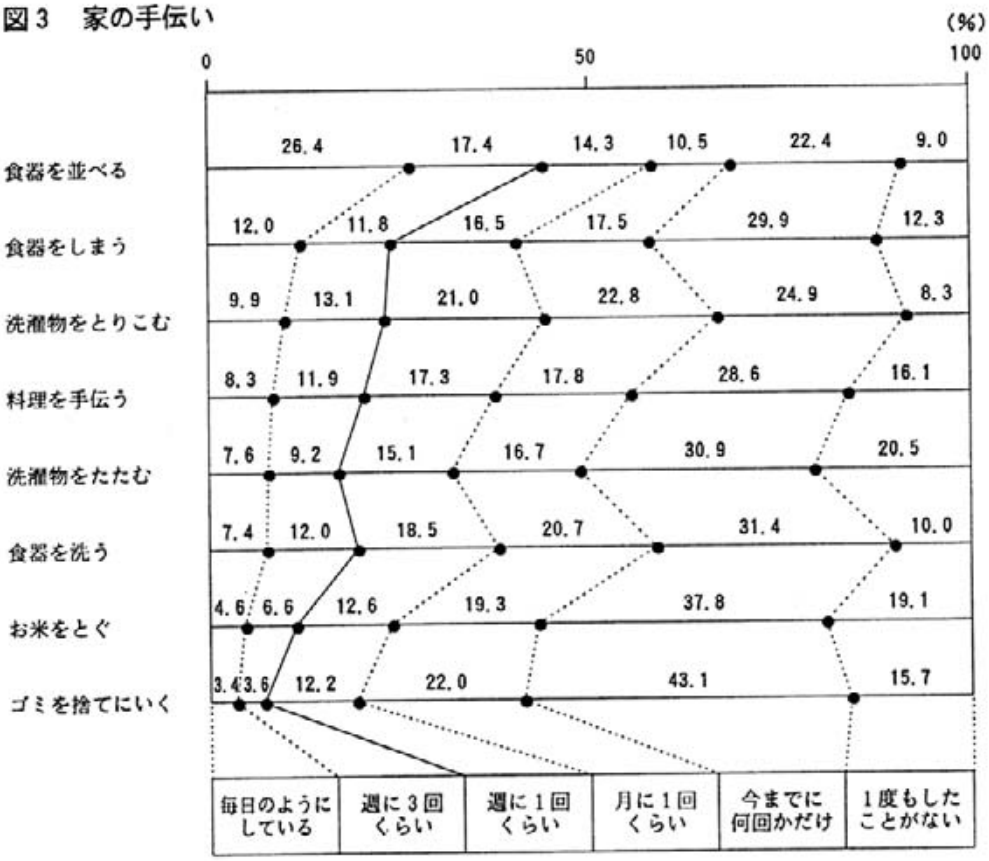


箸の持ち方や机の整理整頓などの基本的なしつけは，小学生の頃にきちんと身につけたと答えている。部屋の掃除も「中学校１年の頃」の32.7%を含めて74.2%，つまり４人に３人は，中学生の頃までに，部屋を掃除するようになっていると答えている。

正直な印象として，親たちから話を聞く限りでは，生徒たちの生活習慣はもう少し崩れているように思う。しかし，少なくとも生徒たちは，自分はきちんと暮らしているつもりと答えている。

それでは実際に，生徒たちの生活習慣はきちんと確立されているのか。図３によると，「食器を並べる」や「食器をしまう」「食器を洗う」など，家庭の中での手伝いを「毎日」は無理としても「週に３回くらい」している

図３　家の手伝い



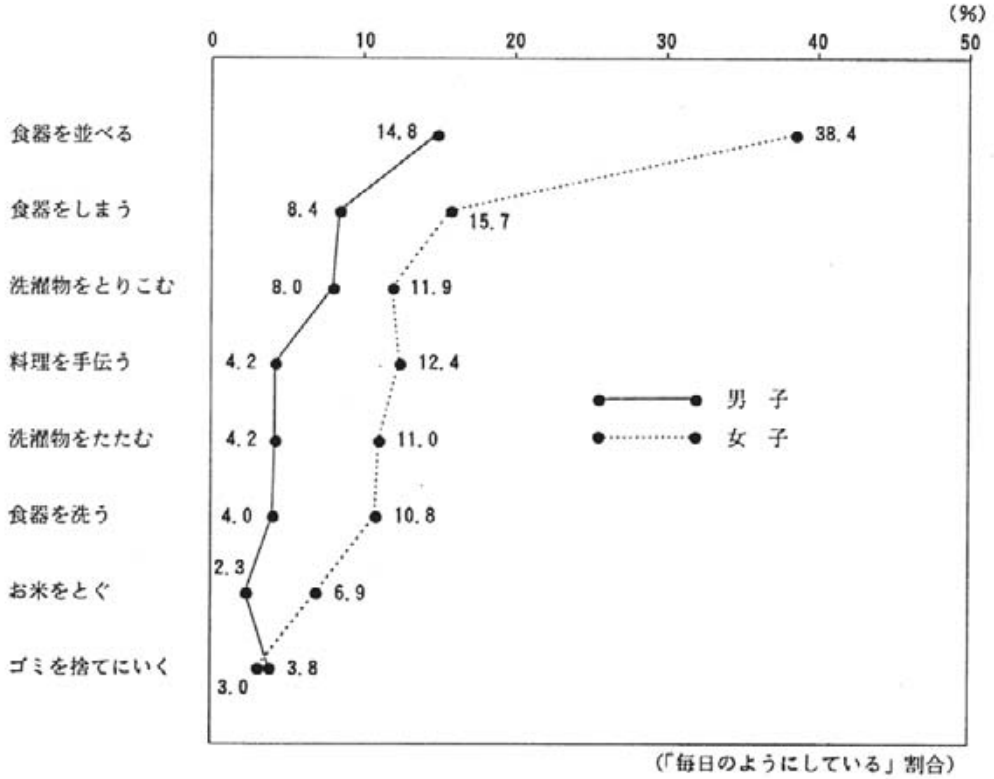
生徒は，「食器を並べる」で43.8%，その他は，2割程度をしているのにすぎない。

子どもといっても高校生なのであるから，それなりに家に役立ってよいと思うのに，どうやらほとんどの生徒は，親のしてくれるままに，してもらうだけの生活を送っているようにみえる。

そして，手伝いを毎日している割合を性別に図4にまとめてみた。

男子は，たまに食器を並べるだけで，あとは何もしていないし，女子も男子と比べると多少しているのは確かだが，それは男子と比較した場合で，女子もほとんどしていないのに等しい。

図4　家の手伝い × 性



(「毎日のようにしている」割合)

3. 自分のことをしているか

家事の手伝いをしている生徒は少ないようだが，それでも，身のまわりのことは自分でしているのだろうか。

図5によれば，「自分の部屋の掃除」や「自分の下着をしまう」など「いつも自分でする」者がほぼ5割。これに「だいたい自分でする」を含めると，6～7割は自分のことは自分でしているという。しかし**図6**によれば，自分のことをしているのは女子であり，男子は部屋の掃除をしているくらいで，あとのことはほとんどしていない。下着をしまうのも親まかせらしい。

「自立」というときに，基本的なことは生活面での自立であろう。そうした意味で，基本的な自立の遅れているのは，まず男子のように思われる。

そして進路別にみると，**表4**のように，短大へ進む者の生活習慣が自立しているようにみえるが，短大進学者は，以下のような性別構成比となる。

	男子	女子
むずかしい4年制大学	71.1%	28.9%
まあまあの4年制大学	65.3%	34.7%
短　大	0.9%	99.1%
専門・専修学校	38.7%	61.3%
就　職	41.2%	58.8%

したがって短大のデータは，短大というより，女子の傾向を示しているとみなすのが妥当であろう。

図5　自分でしている

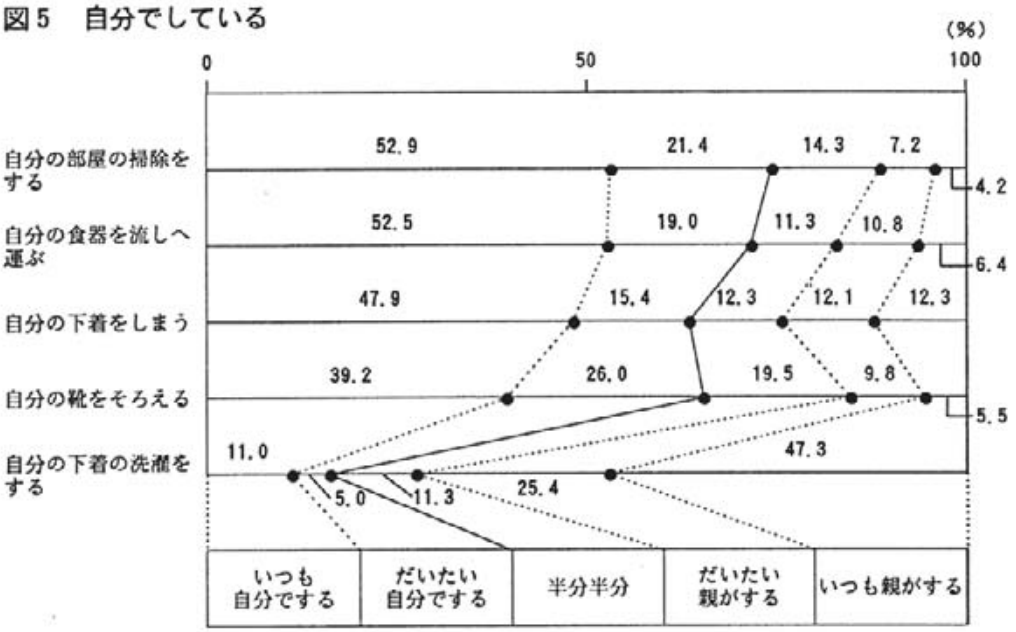
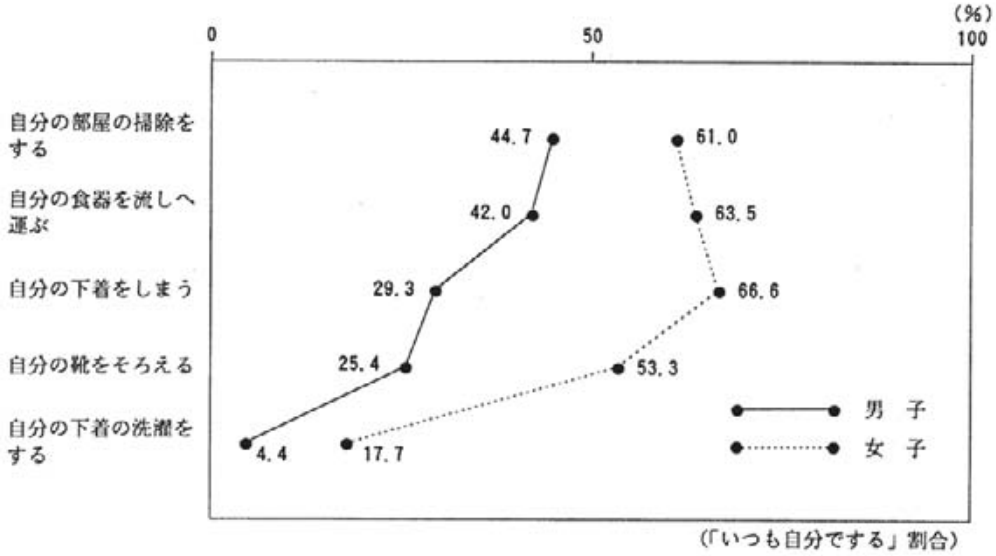


図6　自分でしている × 性



(「いつも自分でする」割合)

表4　自分でしている × 進路

(%)

	むずかしい4年制大学	まあまあの4年制大学	短　大	専門・専修学校
自分の部屋の掃除をする	53.3	48.8	59.9	59.7
自分の食器を流しへ運ぶ	55.9	49.1	60.9	51.6
自分の下着をしまう	46.5	43.8	67.1	45.5
自分の靴をそろえる	37.1	36.9	52.0	31.5
自分の下着の洗濯をする	14.1	8.1	15.1	13.7

(「いつも自分でする」割合)
▭は最大値

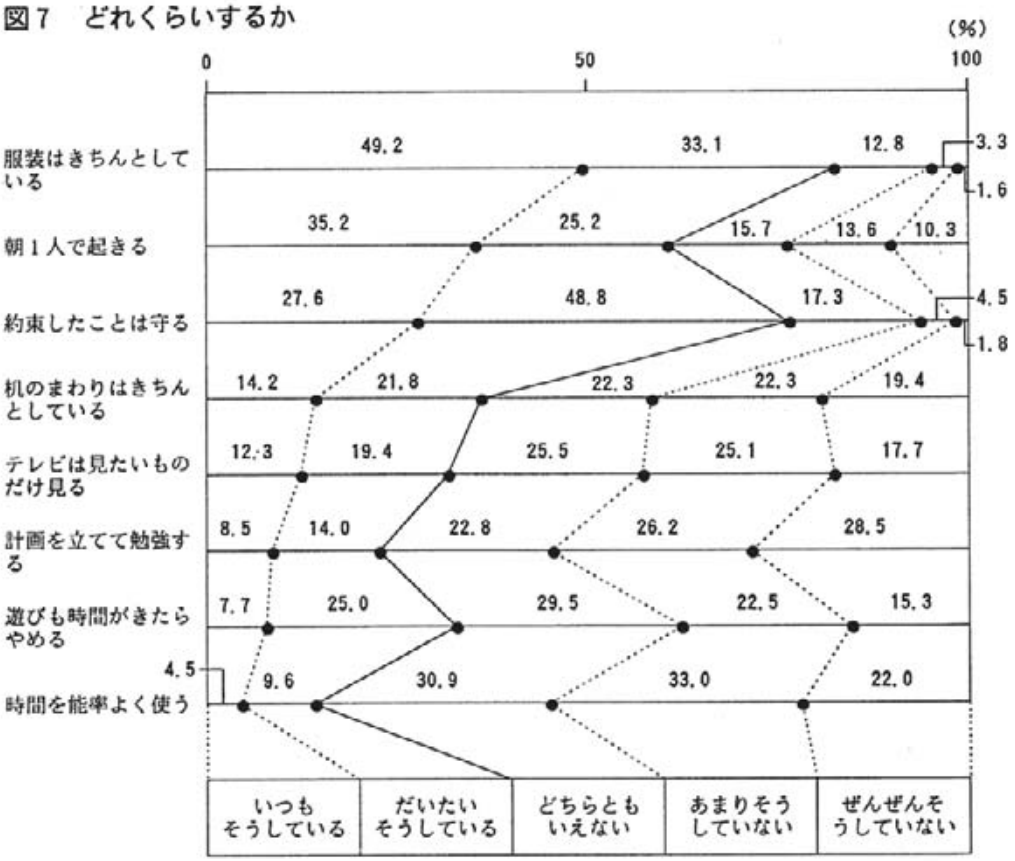
4. 1人でしていること

日本の家庭では，子どもたちは親に依存した生活を送っていることが多いから，そうした面での自立が遅れがちなのは，ある程度までやむを得ないのかもしれない。

それでは，もう少し狭くとらえたとき，生徒たちは自分の生活習慣を確立しているのであろうか。「朝1人で起きる」や「約束したことは守る」「机のまわりはきちんとしている」などについて，自分できちんとしているのかをたずねてみた。

図7のように，「約束したことは守る」はわりとしているものの，「机のまわりの整

図7　どれくらいするか



頓」にしても，「いつも」の14.2%に「だいたい」の21.8%を含めて，整頓を自分でしている生徒は36.0%と，3割程度にすぎない。「ぜんぜんそうしていない」と，親まかせの生活をしている者が19.4%と2割に及んでいる。

したがって，こうした面でも高校生たちの生活習慣の形成が遅れているように思う。高校生にもなって，生活面で親まかせの毎日を送っている。そして図8によれば，ほとんどの項目で，男子のほうが生活習慣の自立が遅れている。また，進路別については，短大を目指す生徒がきちんとした生活を送っているようにみえる（表5）。

家庭の中で高校生が親に依存した生活を送っている。親にしてもらわなくとも，自分で自分の生活を送れる，それが自立の第一歩であろう。そうした意味で，高校生たちは生活習慣形成の前提が崩れているように思う。

図8　どれくらいするか × 性

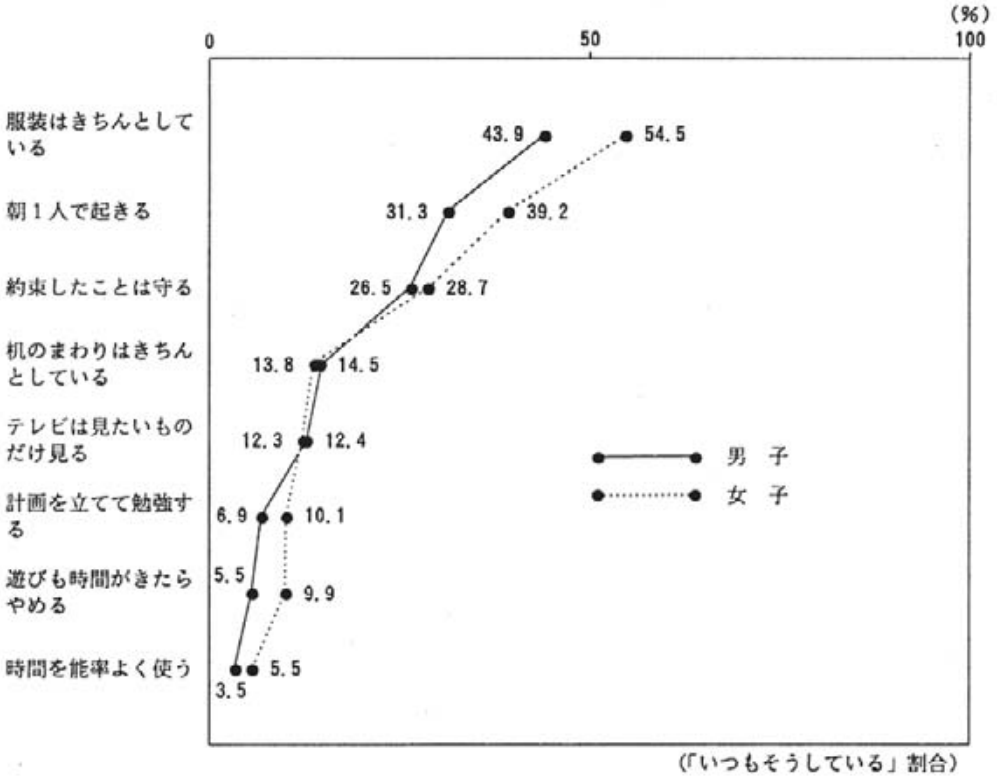


表5　どれくらいするか × 進路

(%)

	むずかしい 4年制大学	まあまあの 4年制大学	短　大	専門・専修学校
服装はきちんとしている	48.8	45.8	58.9	49.2
朝1人で起きる	37.1	33.1	37.5	36.3
約束したことは守る	24.7	27.2	30.3	23.4
机のまわりはきちんとしている	17.4	13.8	12.5	10.6
テレビは見たいものだけ見る	18.2	10.9	9.9	11.4
計画を立てて勉強する	14.1	7.5	9.3	4.0
遊びも時間がきたらやめる	9.4	6.9	9.9	4.0
時間を能率よく使う	5.9	3.8	3.3	5.6

(「いつもそうしている」割合)
◯は最大値

第Ⅱ章 親との関係

1. 親とうまくいっているか

高校生にしては親まかせの生活をしているという姿がうかんできたので，ここで改めて親との関係を調べてみよう。

表6に，親との関係がうまくいっているかを，子どもの頃から現在，そして将来にかけてたずねた結果をまとめてみた。これを「とても」「かなり」に限って，うまくいっている割合を示すと，図9となる。

これまで，子どもの頃から親との関係がうまくいっていた。その頃と比べると，現在うまくいっている割合が減ってきたが，それでも「とても」の23.2%に「かなり」の31.2%を含めて54.4%。これに「やや」までを加えると，「やや」が33.8%なので88.2%と，ほぼ9割が親と仲むつまじく暮らしているらしい。

しかも，そうした親との仲のよさは，図9に示したように，これまでも親と仲むつまじくやってきたし，これからも仲よくやっていけるだろうという。

なお，性別に着目すると，男子，つまり，息子よりも娘のほうが親と仲よく暮らしている割合が多い（図10)。また進路との関係でいえば，図11のような結果が得られる。

親と仲よく暮らしていることを批判する気持ちはない。というものの，これが小中学生でなく，高校生のデータであることを考えると，親との関係がこんなに円満でよいのか疑

問が生じてくる。

子どもの頃はともかく，高校生くらいの年齢は，親にもっとも批判的になる年齢なのに，このデータによると，親と距離を置くというより，むしろ親と密着している感じがする。

そして，前にふれた子どもたちの親に依存した生活態度の背景に，こうした親と心理的に一体な人間関係があるように思う。そう考えると，親との仲むつまじい姿を肯定的に捉えるのがよいとは思えなくなる。

表6　あなたと両親の間柄（過去～将来）

(%)

	とてもうまくいく（いっていた いっている いっているだろう）	かなりうまくいく（いっていた いっている いっているだろう）	ややうまくいく（いっていた いっている いっているだろう）	ややうまくいかない（いかなかった いっていない いっていないだろう）	かなりうまくいかない（いかなかった いっていない いっていないだろう）	ぜんぜんうまくいかない（いかなかった いっていない いっていないだろう）
小学校5，6年の頃	32.9	34.1	24.0	5.0	1.9	2.1
中学校2，3年の頃	21.8	29.5	30.4	10.3	4.2	3.8
現　在	23.2	31.2	33.8	6.1	2.7	3.0
高校を卒業する頃	21.1	30.4	33.7	7.8	3.9	3.1
20歳くらいの頃	21.7	30.8	33.0	7.7	3.5	3.3
25歳くらいの頃	25.1	30.3	31.7	6.5	2.9	3.5

図9　両親との関係

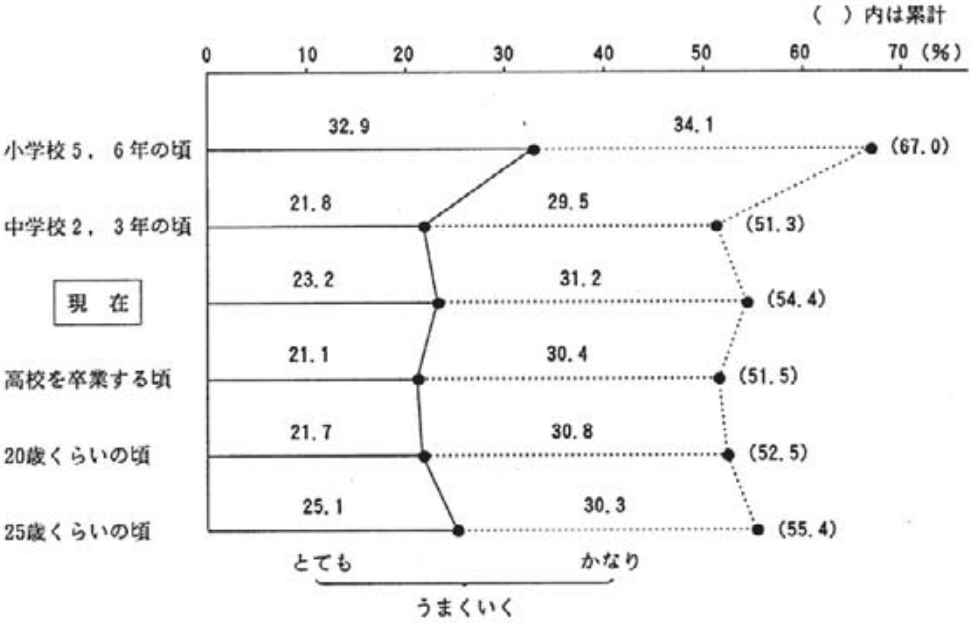


図10　両親との関係 × 性

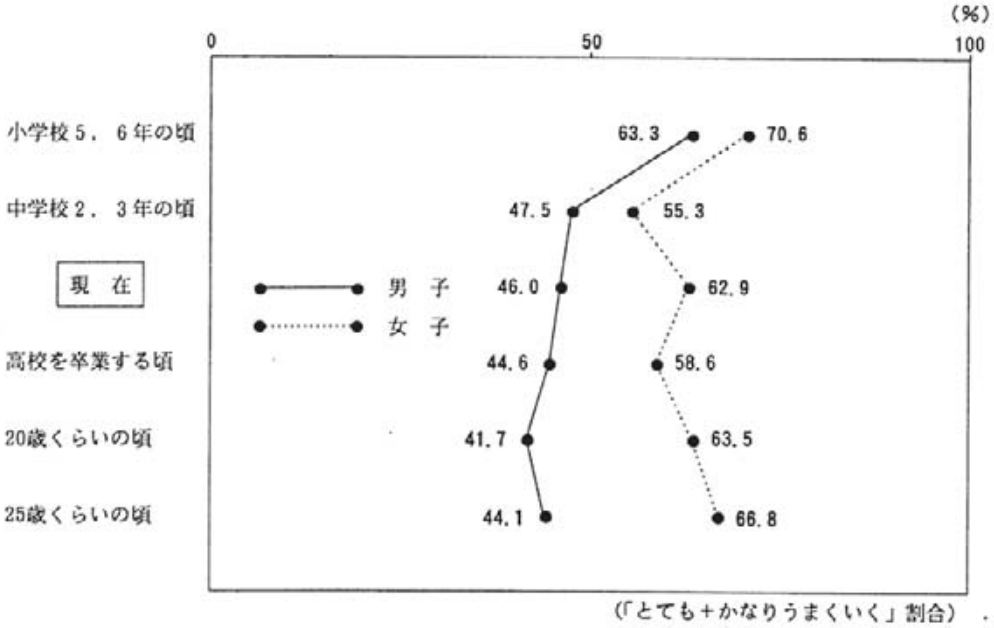
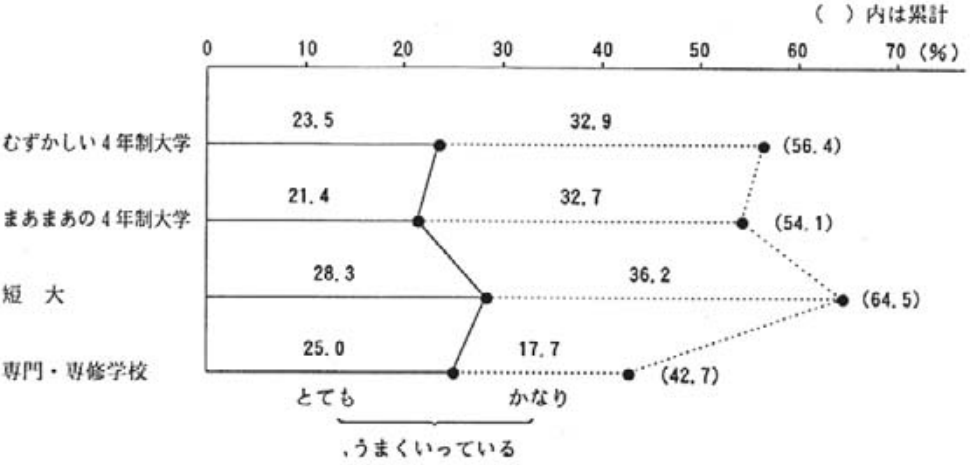


図11　両親との関係 × 進路

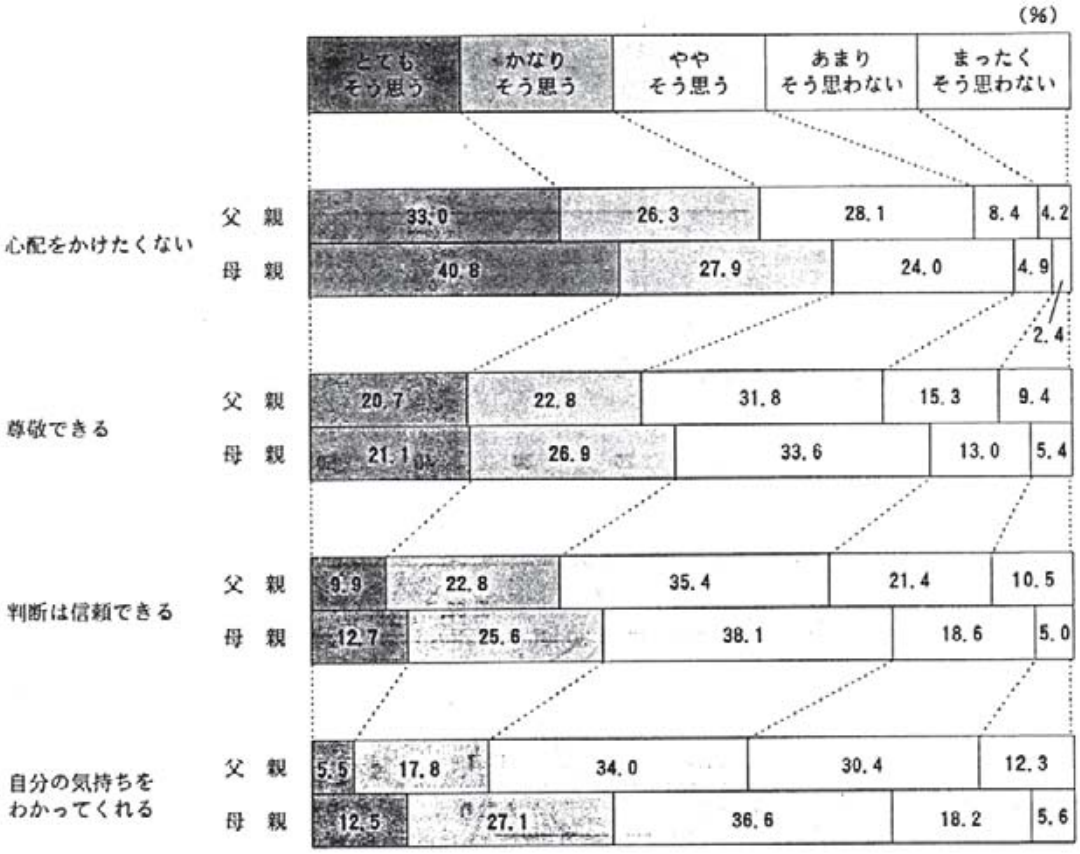


2. 両親への気持ち

それでは，高校生は親にどういう気持ちを抱いているのか。父親と母親とに分けて，親への気持ちをたずねると，図12のような結果が得られる。

高校生は，母親はむろんのこと，父親に心配をかけたくないと思っており，親を尊敬している割合は「やや」までを含めると，父親に対して75.3%，母親へは81.6%である。そして，父親，母親ともに，親の判断力は頼りになると答えている。したがって，高校生た

図12　両親への気持ち



ちが親に批判的というより，親に愛着を感じ，親に頼っている印象を受ける。

そうした親への気持ちを性別に分けて分析すると，表7（図13）の通りとなる。父親と母親とで，子どもたちの気持ちはあまり変わりはない。

ただ，表7に〇印をつけたので明らかなように，自分の気持ちをわかってくれ，心配をかけたくないのは，男子，女子に共通して父親よりも母親に対してであり，男子（息子）は母親よりも父親を判断が正しく尊敬するのに対し，女子は父親よりも母親を判断が正しく，尊敬できると思っている。

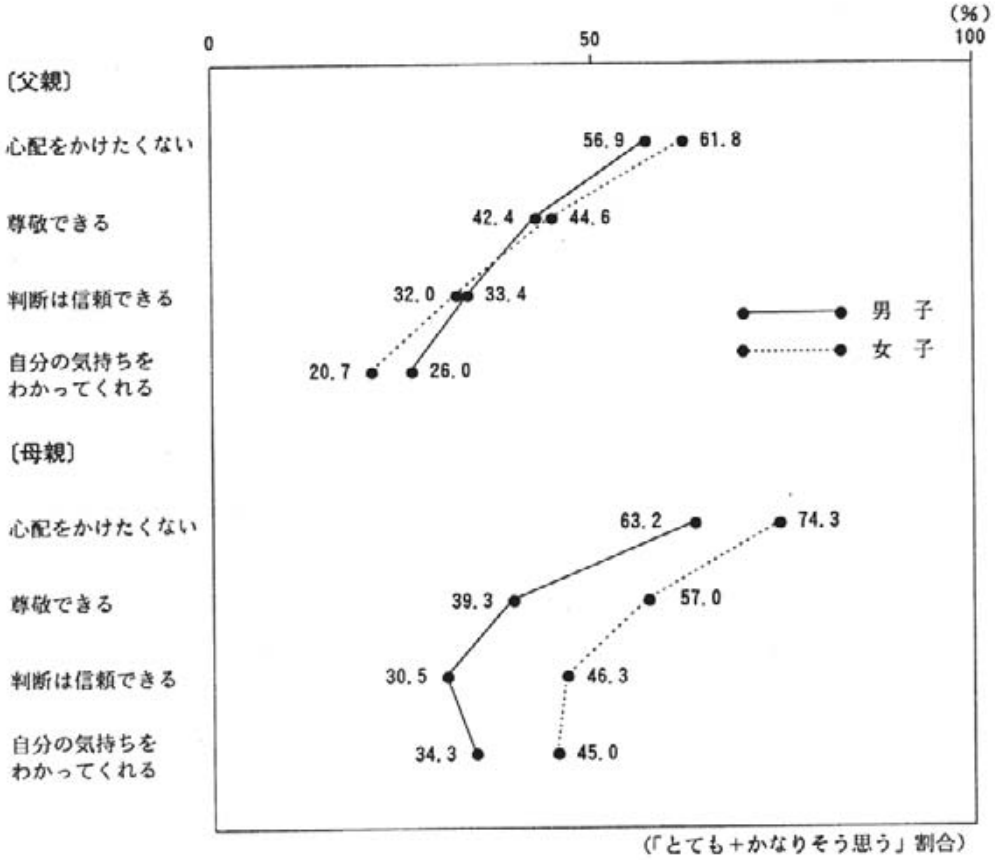
そうした中で，全体としてみると，娘が母親を大事に考えているのがわかる。いずれにせよ，現代の高校生は親に依存しているというより，親に愛着を感じ，親子関係が円満に進んでいる。望ましい，あるいは，ほほえましいと思う反面，なんとなく心理的な離乳の遅れを感じる。

表7　両親への気持ち × 性

（%）

		男子			女子		
		とても	かなり	小計	とても	かなり	小計
心配をかけたくない	父親	30.0	26.9	56.9	36.0	25.8	61.8
	母親	35.6	27.6	〇63.2	46.1	28.2	〇74.3
尊敬できる	父親	18.9	23.5	〇42.4	22.6	22.0	44.6
	母親	15.6	23.7	39.3	26.7	30.3	〇57.0
判断は信頼できる	父親	9.8	23.6	〇33.4	10.0	22.0	32.0
	母親	8.9	21.6	30.5	16.6	29.7	〇46.3
自分の気持ちをわかってくれる	父親	8.4	17.6	26.0	2.6	18.1	20.7
	母親	10.2	24.1	〇34.3	14.9	30.1	〇45.0

図13　両親への気持ち × 性



3. 母性的な気持ち

欧米では，女子生徒の親になる心構えが欠落しがちだといわれる。そうしたところから女子生徒－男子生徒も含めて－に親になるための心構えを身につけさせる教育，つまり親性の教育が叫ばれ始めている。しかし日本では，親子関係が円満なので，そうした不安は不必要なのではないかと思う。図14のように，親性についての設問を加えてみたが，全体として，「わりとそう」の割合が多い。特に女子高校生は「赤ちゃんはかわいくて，抱いてみたい」と答えている者が多い（図15）。また進路別では，短大進学予定者に親性の持ち主が多い（表８）。

したがって，密着型の親子関係の中で，自立という面で問題が多いのは確かだが，そうした反面，女子を中心に親準備性は定着している。

図14　あなたの気持ち

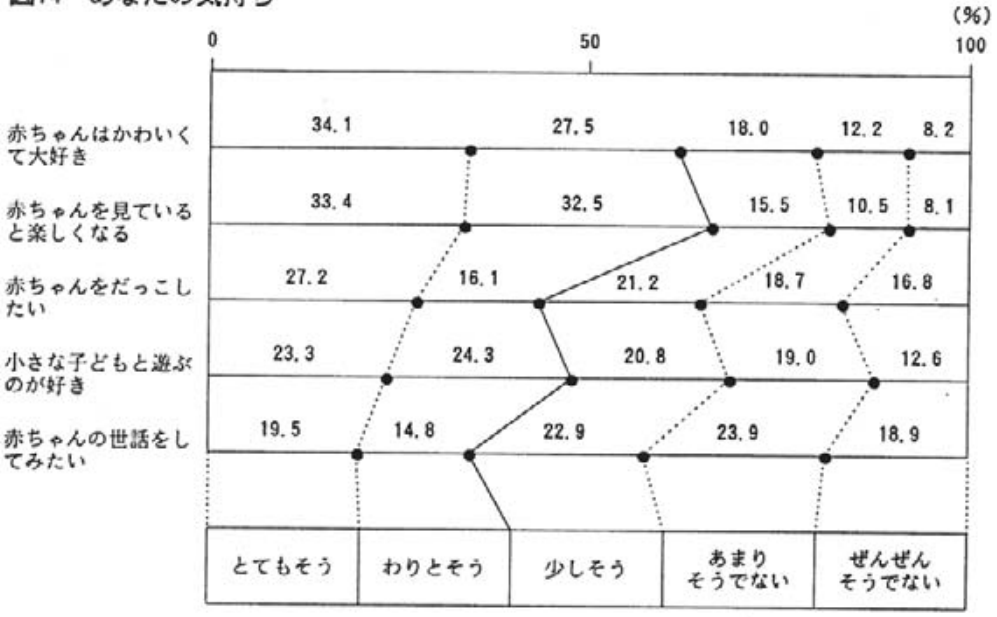
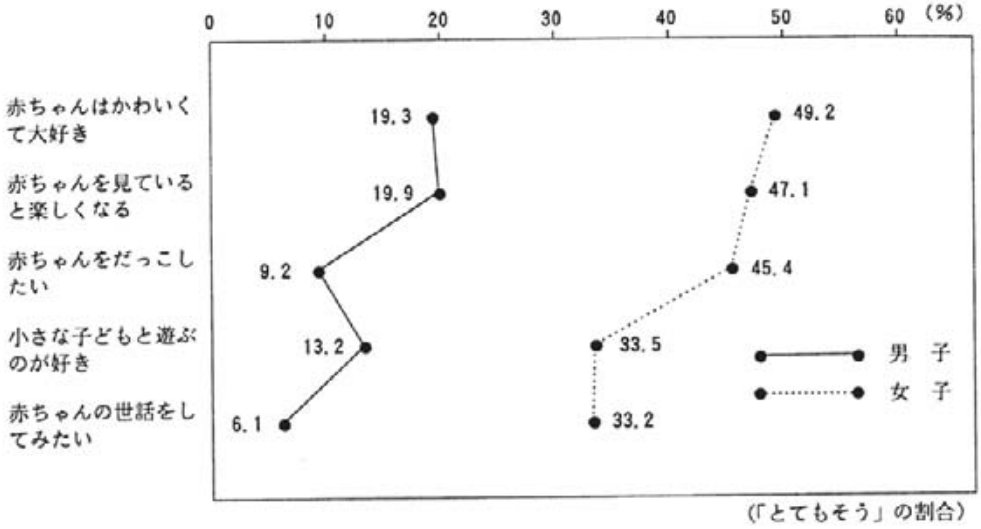


図15　あなたの気持ち × 性



(「とてもそう」の割合)

表8　あなたの気持ち × 進路

(%)

	むずかしい 4年制大学	まあまあの 4年制大学	短大	専門・専修学校
赤ちゃんはかわいくて大好き	60.6	62.8	85.5	65.4
赤ちゃんを見ていると楽しくなる	56.5	57.2	84.7	59.7
赤ちゃんをだっこしたい	33.5	37.0	71.1	50.0
小さな子どもと遊ぶのが好き	43.0	41.7	70.4	51.6
赤ちゃんの世話をしてみたい	25.3	25.2	42.0	35.5

(「とても＋わりとそう」の割合)
◯は最大値